

美しい身体

—— 1930年前後の日本における裸体運動観 ——

斎藤昌人

はじめに

ドイツを中心に展開していた「裸体運動」の日本での受容に関して、とある本には例えれば次のように書かれている。

大體健康増進の運動は、數年前からいろいろと「まづ健康」などの標語に宣傳されはしたが、なに一つ具體的の實行運動に入つてゐない。この間にこれらの尖端兒らは、早くも本場のドイツから「はだか體操」の書物を取り寄せて、實際的に研究をし始めたものである。¹

この文章は、体育関係の研究者や、専門分野としてではないが、裸体運動に関心を寄せる大学関係者、さらには新聞記者等が書いた文章を編集し、『裸體運動』²なるタイトルのもとで出版された書物の一文である。発行は1932年となっているので、少なくとも1920年代の後半あたりには、すでに「裸体運動」は語られていたと考えることができる。

もちろん、ここで「はだか體操」と表現されていることから推測できるように、この運動は、「屋外の太陽の光のもとでの裸体での體操」と当時は理解されていた。ただし、「はだか」に関しては様々な捉え方があり、文字通り全裸を主張する者から、局部は覆う、さらには上半身のみ裸というレベルまであり、その点に関しては、必ずしも一致はしていない。

また、ここで語られる「はだか體操」が「本場ドイツ」の裸体運動と、どのように関係しているか、あるいは日本独自の部分があるのかについても明確に語られているわけではない。とはいえ、「ひなたぼっこ」や「日光浴」との根本的な違いも力説されていて、その意味において少なくとも「運動」というレベルでとらえるべきものと考えられている。

ここでは、依拠する文献はかなり限られてはいるが、1930年代に「裸体運動」がどのように語られているかを確認することによって、その問題点を見ていきたい。

¹ 星野龍猪「裸體運動と健康美」、金子佐一郎編『裸體運動』（「山と旅」陽春特別臨時増刊）、J・C・C、1932年、103頁。なお、以下本稿での引用において、旧字体の原文を、一部新字体に置き換えているものもあることを、ここで最初にお断りしておく。

² 上記注1参照。

1. 「日光浴」と「裸体運動」

ドイツを中心に展開された裸体運動のルーツは、広くとらえた場合、近代化にともなう工業化や都市化を背景に生まれてきた「生活改革運動」に求めることができる。とりわけ問題とされたのは都市環境の劣悪化であり、生活改革運動は、そのもとで損なわれていく個々人の健康を取り戻そうというものである。その流れの中で、人間に本来的に備わっている「治癒力」こそ「最良の薬」だとする自然治癒の考えが定着していき、さらにその治癒力を最大限に引き出すためのものとして、人間を取り巻く自然が持っている様々な力が見直される。その背景には、都市化によって人間と自然との接点が失われてしまったという反省があり、その意味で、とりわけ水や太陽の光が注目を浴びるようになる。

そのような、水や日光に備わっているとされる自然の治癒力を最大限に引き出そうとした初期生活改革運動実践者の一人として、スイスのアーノルト・リクリ (Arnold Rikli) を挙げることができる。彼はそもそも発汗作用に身体の回復機能を求め、その発汗作用を促進させるために日光を利用し、そして最終的には、もっとも直接的な形で日光を取り入れるために「裸体」にたどり着く。それが、「裸体運動」の直接的なルーツとされている。

実際、「關西、否西日本切つての此の運動のリーダーであり且つ実践家」にして「これ程此の道に造詣の深い人は他に無い」³と称えられる人物は、その点に関して次のように触れている。

1750年頃に、フランスのルツソーは、「自然に還れ！」と絶叫し出した。それは、あまりに自然に背いた生活が、各方面で、人の生活を損ねてゐる事がわかつて來たからだ。(略)

1855年に、スキスのアルノルト・リクリがオーストリアで大氣療法を初めた。(略)

1902年に、スキスのベルンハルトが局處的日光療法を初めた。

1903年に、これもスキスのロリエ博士が、初めて全身的の日光浴を初めた。博士が近世日光浴の開祖と云はれている。⁴

ただ、そのように裸体運動の歴史をたどる加茂自身、とりわけドイツにおける裸体運動の歴史に深く分け入っていくわけではない。裸体運動のイデオロギー的側面に大いなる影響を与えたりヒャルト・ウンゲヴィッター (Richard Ungewitter) について、「實際家といふよりも、むしろ理論家」⁵としながらも、その「理論」そのものについてはほと

³ 西岡一雄「日光浴から裸体運動へ」、前掲金子所収、66頁。

⁴ 加茂正一『現代生活と日光浴』(=加茂1)、文友堂書店、1938年、26頁。

⁵ 同上書、138頁。

んど触れずに、「ウンゲヴィッター氏の如きも、夙に不自然な衣類と、非衛生的な屋内生活から解放されて、野や山に出てハダカになれと主張してゐた」⁶と、むしろその実践面を強調している。その点、「裸體運動研究者」でもあり実践家でもある齋藤由理男は、裸體運動の理論そのものを問題にしようとしている。

最近獨逸のウンゲヴィッター氏の吹込んだ裸體運動の如きは、今日その思想を受けついだ人たち、殊に有名なるハンス・ツーレン氏の主張等が取り入れられて、うら若き男女が完全な裸體となり、即ち身に一物をすらまとはぬという徹底ぶりなのである。これに類した裸體運動思想は獨逸のみに限らず、(略) 廣く行き渡つてゐるといふ現勢である。(略)

これについて、然らば如何なる根本思想と指導原理に立脚して居るか云ふことは、私共裸體運動研究者にとつては慎重なる問題であると共に、大いに參考視し且つ又深甚の考察を必要とする場面なのである。⁷

齋藤は、ドイツを中心に広まっている裸體運動の「思想」的側面も視野に入れた上で、それを考察の対象としている。ここに、「専門家」としての齋藤と、アカデミズムの世界に関係しながらも、体育の専門家ではない加茂との間の違いを見ることもできるが、ただ両者は「日光浴」と「裸體運動」との関係に言及するとき、その見解をほぼ一つにしている。

吾玉川學園の裸體運動精神は、勿論これを徹底的に宗教的、思想的のものにまで押し進めて指導してゐるが、今日一般に知られてゐる二三の裸體々操は、たゞ單に日光療法的な醫學的見地の下に立てる裸であつて、これを獨逸やオーストリア等の裸體々操、或はロシア等の裸體運動の如き、醫學的見地の上にさらに一種の信念のほとばしりとしてこの裸體運動を行つてゐるのは、大いにその趣を異にしてゐる。⁸

齋藤は、裸體運動の持つ医学的な側面を評価しながらも、それ以上に精神的な面を強調する。加茂もまた、「日なたぼっこ」に触れる中で、「たゞ、『日なたぼっこ』と『日光浴』と、どこが違ふか」⁹と問いかける。

たゞ、暖かくていゝ気持ちだから、日にあたらふと考へる「日なたぼっこ」根性とは、そこに大きな違ひがある。

「日なたぼっこ根性」は、實に甚だ水くさい気持ちで、少し光線が強く感じられ

⁶ 同上書、136頁。

⁷ 齋藤由理男：「歐州に於ける裸體運動の實際」(= 齋藤1)、前掲金子所収、20頁。

⁸ 齋藤由理男：「歐州の裸體運動に對する批判」(= 齋藤2)、前掲金子所収、59頁。

⁹ 加茂1、12頁。

るやうになつてくると、何時とはなく日に遠ざかり、太陽をさけやうさけやうとするばかりでなく、むしろ之を忌むやうな気持ちにまでもなつて了ふ。¹⁰

つまり、「日なたぼっこ」は、「とかく氣候の良いときのみに限られる」¹¹のである。もちろん、加茂は、「日なたぼっこ」と「日光浴」を区別しているのであり、齋藤のように精神的側面をとまわらないものとしての日光浴そのものを否定的にとらえているわけではない。実際加茂は、「日なたぼっこ」は太陽から「暖」をもらうものであるのに対し、「日光浴」は「太陽から紫外線を與へて貰はうとする」¹²こととして、「日光浴」の医学的側面を強調する。この加茂の語り方は、日光浴の医学的側面を超えた次元で裸体運動をとらえようする齋藤の考えとは異なるようにも見える。加茂は「日光浴」にとどまり、齋藤は「日光浴」を超えていく。ただ、加茂は、「日光意識」という言葉を持ち込むことによつて、自身の語る「日光浴」が単に医学的レベルに終わるものでないことを明らかにする。「日なたぼっこ根性」を否定した後、加茂は次のように語る。

「日光意識」はそんなものではない。謂ゆる膚を刺す寒さの中でも、少しでも胸襟を披いて、之を受け入れようとし、又鐵をも溶かせるやうな暑さの中でも、なるべく之に親しまうとする。¹³

「日光意識」とは「少しでも餘計に太陽の光線を浴び」、さらに「その害を受けないやうな身体に仕上げておいて、思ふ存分太陽に親しみ、その光線を貪るほども満喫したい」¹⁴という意識のことである。それは、単に日光から「暖」をとるだけの「日なたぼっこ」とは異なり、そこには、どれほど厳しい氣候のもとでも実践する「鍛錬」という意識がついて回っている。そして「此の日光意識の高潮されたものが、裸體運動に延長される」¹⁵のである。

そのように見てきた場合、加茂にしる齋藤にしる、裸体運動に、日光浴のもつ医学的側面は踏まえつつも、そこにさらに精神的なもの、自己鍛錬的なものを求めているのは明らかである。それは、加茂や齋藤に限ったことではなく、裸体運動に関わる多くの人間に共通する考えでもある。これは何を意味しているのだろうか。それを検証するために、まず、ドイツを中心に展開されていた裸体運動の背景を、彼らはどこに見ていたかという点に目を向けてみよう。

行き先は、第一次世界大戦時のドイツである。

¹⁰ 同上書、47-48頁。

¹¹ 同上書、210頁。

¹² 同上書、12頁。

¹³ 同上書、48頁。

¹⁴ 同上書、47頁。

¹⁵ 同上書、211頁。

2. 裸体運動の「背景」

加茂は、第一次世界大戦下のドイツの状況を次のように書いている。

歐州大戦の最中、肉類やバターなどの主要食料品がだんだん不足して、草根木皮の類の代用で、栄養を撮るに過ぎなかつた、ドイツの青少年達の身体は、見るも氣の毒な程、肉の落ちた、力の無いものとなつてゐた。所謂「脂肪饑饉」の犠牲になつてゐたのだ。¹⁶

そして、その「犠牲」の上にさらに敗戦という現実がやってきたとき、彼らは「今度は精神的に、意氣全く沮喪し」、¹⁷「戦敗國としての現実ですつかり元氣をなくしてゐた」のである。¹⁸

加茂は、敗戦後のその現実に裸体運動高まりの背景を見ている。つまり、「この体力と氣力を失つた、若い國民達に元氣づけるには、『太陽』から與へられる『生命の素』を服用させるのが、一番手軽で有効だと、醫師や体力家達に唱道され」、¹⁹ その結果「志ある憂國の士は、最も簡單にして經濟的、且つ有効な方法として裸体生活、裸体運動を唱導し、各方面に共鳴者が續出した」²⁰ のである。²¹

声の調子こそ違うが、齋藤も加茂と同じような語り方をする。

殊に獨逸今日の體育の發達は、正にこの戦争のもたらせる所産であつて、五カ年もの間艱難をしのび、而して遂に敗戦の憂き目を経験し、戦争に依つて失はれた人、物、産業、それに各國に支拂はねばならぬ賠償金、今日の獨逸は正に悲惨そのものゝ中にありと言つてよい。²²

戦後の獨逸國民は、實に想像以上の深刻な生活を送つてゐる。

それに最近の世界的不景氣と賠償金の支拂ひ、且つ思想問題の擡頭、共産黨員の増加、戦時負傷者の取扱ひ、何から何まで一切の事が、獨逸國今日の世帯を一層困

¹⁶ 同上書、135頁。

¹⁷ 同上。

¹⁸ 加茂正一「日光浴から裸體運動へ」(=加茂2)、前掲金子所収83頁。これは前掲(注3)西岡一雄が加茂の言葉を書き起こしたものである。

¹⁹ 加茂1、135頁。

²⁰ 加茂2、83頁。

²¹ 別の箇所でも加茂は同じようなことを繰り返して語っている。例えば、「ハダカ運動は、戦後の疲弊したドイツ國民を力づける上に大きな働きをなしました。」(加茂1、220頁。)

²² 齋藤1、30頁。

難なものにしてゐる。²³

戦時下の過酷な状況と敗戦後の悲惨な状況、そして「斯うした損失に対する復讐の努力」²⁴を支えるものとしての裸体運動。一見したところ、その流れは自然に映る。ただ、ここではある種意味のずらしが行われている。あるいは本人達もその点におそらくは意識的ではないので、意味のずれが生じていると言ったほうがより正しい。「脂肪饑饉」と語るとき、そこではあくまで身体上の栄養が、そして「戦争によって失はれた人、物、産業」が語られるとき、そこではあくまで物理的・経済的なことが問題とされているのである。

しかし、第一次大戦後のドイツで、「國家と國民の立て直し運動といふ形を採つて現は」²⁵れたとされる裸体運動は次のような文脈でさらに語られる。

何とかして自己の周圍を合理化し、生活の簡易化、心身の鍛錬を基礎として獨逸魂の建設、而して國民を今日の窮地から救ひ、賠償金の苦しみを一刻も早く脱せんと
の努力は、熾烈なる今日の獨逸青年運動の先驅をなしてゐる。²⁶

このとき、「獨逸青年運動」の担い手としての身体に求められているのは、身体の物理的な強さはもちろん、それ以上に精神的な強靱さである。身体の強固さを精神面の強靱さへとずらししていくというのは、この敗戦を契機として始まったことではないが、問題はその「ずらし」の自然さでもある。それゆえ、裸体運動との関連のなかで、「『人』としての力、『國民』としての力、それをドイツ國民は、眞劍に養つてゐるのです」²⁷と語られるとき、その「力」を明確に定義することはできないし、また「ドイツでは男女老若を問はず、大戦で傷はれた國民の體を改造するために、ハダカ體操の團體へ入つてゐる」²⁸と語られるとき、その「體質」なるものが純粹に健康や体力を意味しているかは非常に微妙である。裸体運動における「身体」が問題にされるとき、そこでは、精神と、そして肉体としての身体を分けて語ることそのものが無意味であるかのように身体は提示される。

その語り方は、彼らが裸体運動をどのような側面から評価しているかという点とも関係している。「歐州に於ける裸體運動の實際」を調査する齋藤は、特に「ロシア」の事情に触れている。

²³ 齋藤 2、63-64頁。

²⁴ 齋藤 1、30頁。

²⁵ 加茂 1、137頁。

²⁶ 齋藤 2、64頁。

²⁷ 加茂 1、219頁。

²⁸ 柏里夫「各國兒童の日光浴運動」、前掲金子所収、38頁。

裸體々育の如き自覺したる體育が、ロシアに於て發達してゐると言ふこと、殊に階級の思想の撤廢を叫ぶロシアが、今日各所に競技場を作り、勉めて以後述べんとする獨逸式裸體競技運動の獎勵に努力してゐるのを見るときにこそ、不純スポーツの革新を叫ぶ私共は、又注目すべき點でもあると思ふ。²⁹

「ソビエトロシア」の教育制度に関しては、「我國のそれとは全然相容れないものである」³⁰と考える齋藤も、こと裸體体操については一定の評価をしている。その理由の一端は次の言葉から読み取ることができる。

階級思想を持たないロシア、(略) 彼等は眞剣に活きんがための努力以外にないロシアに、勃然として裸體々操の起こりつつあることを知ったとき、我が日本の體育愛好者の大いに考慮せねばならぬことではなからうか。³¹

これは、「不純スポーツ」を攻撃する文脈で語られているが、その攻撃目標が、「不純スポーツ」を超えたより広い領域で見据えられているのは明らかである。問題は、裸體運動の本質をどこに見るかである。追いつめられたいわばぎりぎりの状況とそれを乗り越えるための「眞剣さ」や精神的厳しさ。齋藤をはじめとする多くの人間は、そこに裸體運動のある種の本質を見ようとしているのである。

ただ、この時代の裸體運動は、ドイツにおいてはすでに「大衆の余暇活動という現象として広まっていった」³²ともとらえられている。それを踏まえた時、齋藤に見られるような裸體運動観は、あくまで裸體運動の一面をとらえたものである。ただし、ドイツ人は、「この不景氣のドン底にあつて、(略) 種々様々な様式に於いて不景氣と戦ひ、この世相打開に全勢力を注いでいる眞剣さ」³³を有し、「斯うした眞剣の結晶が、直接體育運動に反影して來るのも亦當然のこと」³⁴と語る時、その裸體運動観は一貫している。その「眞剣さ」のもと、裸體運動には、「延いて己の生活までもこの精神に依つて律せんとする」³⁵という役割が与えられるのである。

もちろん、このような身体と精神の健全や健康を一つのものとして語る語り口は、今に始まったことではなく、とりわけ国民国家建設の時代以降、そして日本では明治維新以降着実に浸透していったものでもある。そして、今ここで問題にしている第一次世界

²⁹ 齋藤 1、23頁。

³⁰ 齋藤 1、22頁。

³¹ 齋藤 2、61-62頁

³² Ulrich Linse: Zeitbild Jahrhundertwende. in: ›Wir sind nackt und nennen uns Du‹ Von Lichtfreunden und Sonnenkämpfern. Eine Geschichte der Freikörperkultur. Hrsg. von Michael Andritzky, Thomas Rautenberg. Gießen 1989, S. 26.

³³ 齋藤 2、63頁。

³⁴ 同上書、64頁。

³⁵ 同上書、65頁。

大戦前後のドイツにおいて、そのような語り方は一つのピークを迎えている。「1914年の思想」(„Die Ideen von 1914“)としてくくられる、戦争を思想的な面からバックアップする言説は、とりわけ戦争勃発から数ヶ月の間で激しい高まりを見せている。大学関係者や作家をはじめとする多くの知識人が、戦争遂行のための理念を語る。戦争は、「うわべだけの文明のまっただ中において、魂の文化を救い出すもの」、³⁶「ドイツ的なるものをその危機から救い出すもの」³⁷であり、そこではとりわけ「戦争の純化作用」が強調される。つまりこの戦争によって、「知的技術的文化の途方もない発達のもとで」失われてしまった「道徳的意志の力」を再び取り戻し、「民族の芯は健康である」ということが示されなくてはならないのである。³⁸

そして、敗戦という現実を前に、その「理念」はまだ語り続けられる。

我々自身が、正しき人間で、我々自身が、精神的そして道徳的に世界史的な偉大さへと自分たちを高めていたなら、我々の敵も、表面的なレベルではどれほど優勢でいようが、勝利を収めることはなかったであろう。³⁹

社会的・歴史的コンテクストを無視し、この言葉だけをその背景から切り離して取り上げ問題にすることに關しては、慎重でなくてはいけない。ただ、少なくともここで精神的・道徳的な力の弱さが戦争の敗北を招いたのであり、ドイツ民族が真にそれを有する「正しき人間」であったなら、戦争に勝利を収めていたと語っている事実に関しては動かしようはない。ドイツ民族は「現時点では病んでいる」⁴⁰のである。

そもそも「生活改革運動」そのものが、「生存競争」に打ち勝つためには「精神力が強化されべき」⁴¹とする考えを有するものであるが、その考えはとりわけ戦争の高揚感と結びつく。例えば、ヒンデブルクも「最良の神経を有する民族が勝利を収めるだろう」⁴²と語ったとされる。そして敗戦後のドイツにおいても、そのような語り方はされている。例えば、「1920年代並びに30年代におけるドイツ裸体運動を語る上で忘れてはならない人物」⁴³とされるハンス・ズーレン (Hans Surén) にとって、「敗戦後のドイツ民族は肉体的そして身体的危機的状况」にあり、「我々の時代の精神的危機」から立

³⁶ Hermann Lübbecke: Politische Philosophie in Deutschland. Studien zu ihrer Geschichte. Basel 1963. S. 185.

³⁷ Ebd., S. 189

³⁸ Ebd.

³⁹ Rudolf Eucken, hier zitiert von Lübbecke, S. 235.

⁴⁰ Eucken, hier zitiert von Lübbecke, S. 236.

⁴¹ Ulrich Linse: Völkische-rassistische Siedlung der Lebensreform. in: Handbuch zur „Völkische Bewegung“ 1871-1918. Hrsg. von Uwe Puschner, 1996, München. S. 397.

⁴² zitiert von Linse 1996, S. 397.

⁴³ Dietger Pforte: Hans Surén – eine deutsche FKK-Karriere. in: Andritzky, 1989, S. 130.

ち上がるには、「我々民族には、すべての階級において意識的な自己鍛錬が必要」⁴⁴とされているのである。

そのような語り方は、裸体体操運動の精神的側面を強調する齋藤の語り方と似ている。「戦後の獨逸国民は想像以上の深刻な生活を送り」、そこでは「この世相打開に全勢力を注いでゐる眞剣さを掴むことが出来る」のである。裸体運動を医学的な側面からのみ問題にすることを「裸体運動思想」の欠如とするなら、⁴⁵ 革命後の「ソビエトロシア」や敗戦後ドイツに見られる「眞剣の結晶」⁴⁶こそ、齋藤を初めとする裸体運動の関係者の多くが、その運動の背後に求めようとしているものなのである。

3. 「美しい」身体

そのような自己鍛錬や「眞剣さ」は、反対に彼等が否定的にとらえているものを見ていくと、いっそうくっきりと浮き彫りにされてくる。裸体運動において必ず問題にされる衣服に関し、彼等は例えば次のように語る。

近來服裝簡單化の聲を聞くことが多い。結構な事だ。要するに大部分は外部の飾りにすぎないのだから、なるべく虚飾的なものを廢すれば良いのだ。⁴⁷

そのとき、フランスは「着飾りの國」として否定され、⁴⁸ また「自然に反した男子の服装こそ」排撃されるべき対象であり、「カラー、ネクタイ、カフスなどは、人間虚飾の悪産物であるといはなければならぬ」のである。⁴⁹ ここでは、「自然の日光や空気と直接触れるために服を脱ぐ」という、裸体運動がそもそも持っていた衣服否定の理念以上に、衣服の「虚飾」性が強調され否定される。

そのような「虚飾」なるものへの批判は、それ以外の様々なものへの批判と共鳴している。西洋に支配され植民地化した地域の住民の多くは、「全身の皮膚が、かなり鍛錬されてゐた」のだが、「衣類を着せて、常用させる」ことによって、「その抵抗力が弱らされて」きたのである。⁵⁰ また、裸体に対する羞恥心やタブーも、「人間が、本來生まれながらに持つてゐるもので無く」、⁵¹ 「宗教的な考へから、(略) 之を包む事にしたのがやがて裝飾的になり、遂に文化の發達につれて、生活上なくてはならぬものに成つて了つ

⁴⁴ Ebd., S. 131.

⁴⁵ 齋藤 2、59頁。

⁴⁶ 同上書、64頁。

⁴⁷ 加茂 1、125頁。

⁴⁸ 齋藤 1、28頁。

⁴⁹ 高尾亮雄「裸体と日光」、前掲金子所収、116頁。

⁵⁰ 加茂 1、184頁。

⁵¹ 同上書、195頁。

た]⁵² ことによって生まれてくるものとされている。ここでは、衣服や、衣服をまとわせることによって逆に羞恥心やタブーを生み出した「文明化」のプロセスそのものが攻撃の対象とされ、さらにその文明化批判は、最終的に現代社会へ行き着く。

彼等（＝裸体運動家）は、飽く迄も現代文化の或る部に反抗して、質朴簡素なる古代の自然生活に還らんとする主張を高調するのである。彼等は大胆に文化社會の傳統と闘ひ、其煩瑣なる虚飾、浮華なる形式を破壊し、投擲し盡して、一路邁進大自然の懷に突入せんが爲めには、謬れる現代社會の習慣と聊かも妥協する所なく、敢然として悉くその被包をかなぐり捨てなければならぬとするのである。⁵³

裸体運動は、そのような「形式本位の文明生活に對する呪詛」⁵⁴ から生まれてきたとされるのである。

また、アメリカも彼等の俎上に上げられ、その時アメリカは、「不純スポーツ」⁵⁵ や「スポーツ興行化の本尊」⁵⁶ であり、「戰勝國であり、金があり、スポーツなり娛樂なりが各方面に備はつてゐる爲か、裸体運動に理解がない」⁵⁷ 国として語られる。ただ、次の文章は、そのようなアメリカ批判の鋒先が実はどこに向けられているかを明らかにする。

アメリカの活動寫眞を見てきて、無批判的にその服裝の模倣をするなんか非見識な考へは、モウいゝ加減に止めたらどうだ。⁵⁸

アメリカを「娛樂」や「金満」と結びつけ、そこに現代文明の頹廢の象徴を見る視線の先には、実は「アメリカで流行すると、(略) すぐ眞似をする」⁵⁹ 日本人や、その流行が着実に浸透していつてしまう日本の社会そのものが見据えられているのである。

このような語り方は、他の箇所でも見受けられる。

もともと西洋人は、矢鱈に女を大切がるので、女の前ではなるべく皮膚を見せないやうに遠慮して、頸筋も胸も足も、すっかり包んで了つた。

そして、握手をするのに、婦人の手に汗がついてはといふ所から、夏でもわざわざ手袋を穿く。總體が女に媚びた服裝なんだ。⁶⁰

⁵² 同上書、188頁。

⁵³ 寺澤嚴男「獨逸に於ける裸体運動」、前掲金子所収、10頁。

⁵⁴ 加茂1、135頁。

⁵⁵ 齋藤1、23頁。

⁵⁶ 齋藤2、61頁。

⁵⁷ 加茂2、93頁。

⁵⁸ 加茂1、128頁。

⁵⁹ 加茂2、93頁。

⁶⁰ 加茂1、126頁。

ここでは西洋の男性服が批判の対象とされているが、その背後には、「女は衣服を人格化して考へてゐるのが面倒だ」⁶¹という言葉から読み取れるように、劣った性としての女性が想定され、その劣った性としての女性にさらに「媚びる」西洋男性への攻撃が透けて見える。そして、西洋男性を攻撃する視界には、西洋男性を模倣する「日本男児」が最終の攻撃目標としてとらえられているのは言うまでもないことである。

そのように見てきた場合、少なくともここで取り上げられた裸体運動をめぐる身体は、一つの方向へと収斂していく。そこでは、「真剣さ」とそのもとでの「強さ」が強調される一方、それと歩調を合わせて「弱さ」や「軟弱なもの」、そして「病んだもの」が排除されている。日光浴のもとで「チョコレート色」になり、「まるでびろうどのやうな肌ざはりを感じるやうになる」皮膚こそ、「ほんとうの皮膚の美」とされ、「生白い皮膚、土色の皮膚、青ずんだ白い皮膚」は、「温室に育つた、力のない皮膚に過ぎない」⁶²のである。そしてそのような「本当の皮膚の美」のもとで、身体は肉体的なレベルでの力強さをもたらすだけではなく、それ以上に意味あるものとして、「精神的方面にも、著しい兆候が出て来る」とされる。つまり「神経質なんか吹飛んで」しまい、「神経衰弱なんか夢にも知らない」⁶³のであり、そして「意志が強くなる」⁶⁴のである。

はだかで日光に親しんで黒くなつたほどの男女は、身体も精神も健全その者である。(略)また、鬼難(幽鬼に襲はれる難)の如き神経衰弱の症状は色の白い人間の病氣に決まつてゐる。⁶⁵

裸体運動は、つまるところ「身体と精神の健全」に行き着く。西岡によると、加茂は「裸体運動の目的」として次の五つを挙げる。

- 1 日光に浴して、
- 2 健康を増進せしめ、
- 3 身体の美を造り、
- 4 純潔にして、
- 5 自由なる思想を養ふ。⁶⁶

そして、ドイツ滞在中にとある体育大学を訪れ、そこで「訓練」を受けている「18、9才の娘さん」との会話を、加茂は次のように紹介する。

⁶¹ 同上書、230頁。

⁶² 同上書、45-46頁。

⁶³ 同上

⁶⁴ 同上書、107頁。

⁶⁵ 高尾、115頁。

⁶⁶ 加茂2、83-84頁。

「女は丈夫なのより、美しい方がいゝと思ふのでしやう。」

「健康の伴はないのは、ほんたうの美ではありません。更に、私共は、将来、妻となり、母となる上に、健康が一等大切です。」

(略)

「おしろいや口紅をつけませんか。」

「(略) ルージュなど塗るのは、健全な女ではないのでしやう。(略) 自然が與へて呉れる健康色以外は不必要です。これが一番大切だと思ひます。」

「そうです。そうです。」

すつかり感心させられて了つた。⁶⁷

裸体運動は、このように健康な身体＝美しい身体＝健全な人間という図式の中で語られているのである。そしてその図式が配置される枠は明らかである。

「ハダカになれ！——これは、まじめな健康の問題である。」⁶⁸ 裸体運動を礼賛する一人物はそのように語り、「あまりにも畸形的に虚弱になってゐる我々の生活」⁶⁹を嘆く。ここで取り上げた裸体運動の背後には、そのような「虚弱」への苛立ちと不安が底流している。それは、身体そのものへ向けられたものであると同時に、それ以上に精神的な部分へと向けられている。その苛立ちや不安に、例えば加茂は次のような言葉を与える。

人類とても同じ事。日の恵みの如何に貴いものであるかは、歴史を見ても、日當りの良い地方が先ず榮えて來ている。それがだんだん日の恵みに馴れて、恵まれるまゝに、必要以上の歡樂を求め、必要以上の贅澤をし、安逸を求めて力を濫費し、國家としても、國民としても、遂に弱いものと成り果て、結局「おごる者久しからず」とか、「盛者必衰」とかの運命に落ちて行くのが、歴史の教へている所である。⁷⁰

この語り方は、「正しき人間」であったなら戦争に敗れることはなかったとする、第一次大戦後のドイツで一部に語られていた語り方とある意味似ているし、そこにはソーシャルダーウィニズムの影を見ることが出来る。文明化のプロセスのもと、自然と離れていくことによって虚弱になっていく身体は、それをはね除けるための意志的な力を持たない限り、その身体には、やがて墮落や頹廢という精神や道徳的レベルで負の刻印が押されていく。その行き着く先は、民族や國家の没落とされる。

もちろん、その語り方は彼らだけのものではなく、昭和10年前後という時代背景であればむしろ普通の語り方と言えるかもしれない。ただ、そのような語り方の一つ一つが

⁶⁷ 加茂1、149-150頁。

⁶⁸ 柏、37頁。

⁶⁹ 同上。

⁷⁰ 加茂1、32頁。

新たな身体像を作り上げ、それを定着させ、そして身体を拘束していくものになるとするならば、本来日常の生活に根ざす個人の身体がそのまま民族や国家と結びついてしまう語り方、あるいはその結びつきの自然さには、細心の注意を払っておかなくてはいけない。